

# アグレリアンの立場

## —*I'll Take My Stand* 再検討—

越 智 博 美

### I. 創られた伝統としての「現在の中の過去」

南部文学を研究するものにとって印象的なことばがおそらくふたつある。ひとつは Robert Penn Warren による「敗北してはじめて堅固な南部 (Solid South) が生まれた」というものである。南北戦争は逆説的に「南部各州をより南部的」にし、敗北により南部連合は「魂の集うところ」となった。リー将軍が降伏した瞬間に南部連合は生まれたというわけである。今ひとつは南部文学の性質を語る Allen Tate のものである。「1914年から18年にかけての戦争で、南部は世界に参入しなおした——とはいえ、その境界線を踏み越えるときに後ろ向きの視線を投げかけた。そしてその後ろ向きの視線こそが南部ルネッサンスを生み出した。現在の中にある過去を意識する文学を」<sup>(1)</sup>。

南部の文学研究は上のふたつを自明のものとして歩んできた。公民権運動、女性解放運動などを経て1980年代以降、コロンビア大学のアメリカ文学史に代表されるアメリカ文学研究のあり方を再検討しようとする流れのなか、南部の文学の制度にもようやく見直しの光が当てられはじめた。Michael Kreying はアメリカ文学史に対する Annette Kolodony の問題提起に応える形で<sup>(2)</sup> 南部文学の問題を提示する。それによれば、「現在の中の過去」たる南部は、「歴史的なこと」を下敷きとしながらも、「神話的、普遍的」な「超越論的真実」へと格上げされた南部、「歴史」のように見えながら実際の「歴史にも、政治、イデオロギー、人種、階級、ジェンダー」といったいかなる要因にも左右されない神聖なる「アイコン」としての「南部」であった<sup>(3)</sup>。また、何を南部文学とするか、という「合意 (consensus)」が『南部文学史 (The History of Southern Literature)』(1985) にまで持ち込まれていることに対し、Carol Manning は「南部ルネッサンス」の定義の恣意性を突いた<sup>(4)</sup>。マニングの言うように「南部ル

ネッサンスについての批評それ自体がすでに南部ルネッサンスの一部である」とするならば、逆にそのような批評形態そのものが南部文学というジャンルおよびそのキャンノン、さらには文学史をひとつの制度として形成することにかかわってくることになる。

そして、ひとたびそれが制度として定着したとき、その枠組みは敢えて意識もされないままに、繰り返され、ほとんど自律的といっているほどに内面化され、それは南部文学というジャンル、つまりはテキストの集合をそれとしてささえる集合原理にも、また、「現在の中の過去」というテキストの意味作用の統一性を支えるつなぎ目にもなるだろう。C. Vann Woodward は、W. J. Cash が Erskin Caldwell と William Faulkner を並べて論じたところにキャッシュの限界を見るが<sup>(5)</sup>、そのときにそれがどういう枠組みでそのように思えるのかという判断枠を自明のものとしていて、南部ルネッサンスについて問いかけながら、その問いは南部ルネッサンスを相対化することはない。

批評形態がキャンノン化されている、という点のもうひとつの例として Richard H. King による 1998 年のエッセイ、“Politics and Literature: The Southern Case” を取り上げてみよう<sup>(6)</sup>。ここでキングは Welty, O'Connor などの小説を政治的に読みとろうとする Anne Goodwyn Jones やマニングらの姿勢に対して異を唱え、少なくとも南部ルネッサンスから 60 年代にかけての文学に政治性はないし、そのように読むことには無理がある、と「非政治的」な読みの伝統の中に立って、1980 年代以降に出てきた修正主義的な読み方を批判している。ここでもまた「何故非政治的」なのか、ということへの踏み込みはない。

これらの準拋枠が「歴史的」なものであることは、たとえば 1930 年にリベラル系の Howard Mumford Jones が発表したエッセイ “Is There a Southern Renaissance?” を見ればよくわかる。そこではむしろリベラルな作家たちの名が連ねられ、それを文学の興隆として扱っているが、この作家たちは南部ルネッサンスの作家に取り込まれない場合が多い。これも、とりわけ戦後に確立された南部ルネッサンスのイメージがある種の線引きのうえに成り立っていることのひとつの証左である<sup>(7)</sup>。

さて、上に挙げた南部文学の「常識」を語ったウォレンとテイトは、ふたりとも *Fugitive* 誌 (1922-25) にかかわったモダニズム詩人であり、1930 年に出た南部農本主義のマニフェスト *I'll Take My Stand* の執筆に関わり、その後一見政治にコミットしない、と映る新批評に大きく関わった人物である。

「南部ルネッサンスについての批評それ自体が南部ルネッサンスの一部」というこ

とはつまり一見非政治的、非歴史的な印象を与える新批評こそが南部文学、というむしろ政治性と歴史の要素をはらむジャンルの成立や制度化に関わってきたということでもある。南部文学がアメリカ文学の中でひとつのジャンルとして認識され、大学のコースに入り、アンソロジーに、文学史にページを与えられ、また、南部文学史というものが書かれるようになること——これを南部文学の制度化と呼ぶならば、その制度化のただ中にいたのが非政治的に見える新批評家、かつ政治的な農本主義の人々であった。となると、少なくとも農本主義者として出発した新批評の人々に関しては一般に与える印象ほどには現実に関与しないものでもなければ、象牙の塔の批評でもないのではないか。

「現在の中の過去」というキャッチフレーズが繰り返され、それが南部文学というジャンルの線引きを遂行してきたならば、その場をいまいちど辿り直すことにより、南部文学はその対象も、批評の手法もその地平を押し拡げることができるだろう。そのためにはその制度化の礎を築いた中心人物たちが農本主義者であったという片面の事実のみだけでは不十分であろう。そのようにとれば「反動的な農本主義者＝過去を意識する南部文学」という枠は考えやすいが、しかし、Ransom、テイトラが農本主義の立場を表明しながら同時に新批評を実践してきたこと、また、その後の研究者が南部文学を批評する枠がきわめて新批評的であって、それが批評のひとつのキャンノンとして文学史、アンソロジーの編纂に関わってきた点が置き去られてしまう。だから一見矛盾して見えるとしてもいま一度、政治的には保守の農本主義者と文学の自律性・非政治性をうたうとされている新批評との、新批評と南部文学との論理的接続を、新批評の非政治性の検証も含めて見ておく必要があるのではないだろうか。そのための準備段階として、ここでは農本主義者の取った立場を単に北部の産業化に対抗した「対北部」という従来型の図式にとどまらず、南部の内部での学説のせめぎ合いの中での、そして当時のアメリカ文学研究の中での立場という点から考えてみたい。そうしたときに文学・文学研究の制度へ接続する点が見えてくるだろう。彼らの立ち上げた「立場」とはいったい当時の言説の布置のどこにあったのだろうか。本稿は、*I'll Take My Stand* をアメリカ文学と南部をめぐる言説の多重な関係のなかで捉え直す試みである。

## II. *Reinterpretation of American Literature* ——アメリカにおけるアメリカ文学研究の制度化

南北戦争後、州立大学の拡充や産業化による中流階級が増大したことなどから大学進学率が上昇、それに対応して大学のカリキュラムが古典一辺倒からより実用的なものに再編成されていく過程で、古典ではない「英文学」の学部が成立した。それにもない、ひとつの学問領域としての制度を確立するための動きも現れた。ひとつは英国に先駆け1883年につくられた Modern Language Association of America (MLA) である。English, German, Roman の部門編成でアメリカ文学部門は特に設けられぬままその体制は1920年まで続く。いまひとつは学術雑誌の創刊である。のちのち南部文学の牙城となる *Sewanee Review* もこの時期にはもっぱらイギリス文学を論じる雑誌だった<sup>(8)</sup>。

アメリカ文学の授業は1870年代あたりから新しいものに比較的寛容な大学で提供されはじめ<sup>(9)</sup>、世紀末にはアンソロジー、文学史も編纂されるが<sup>(10)</sup>、その位置づけはあくまで「英文学の一部」であった。アメリカ文学は英文学の格下に位置づけられ、いわゆる「英文学」を専門とする教師が片手間にコースを担当する状況が続いていた。とりわけ、Irving Babbitt, Paul Elmer More, Stewart Sherman など1930年ごろには New Humanist といわれることになるハーヴァードを中心とした一連の人々は、ルソー以来の自然主義やロマン主義を棄却して、ラテン語の古典、ハイカルチャーを支持し、また、その価値観は抑制と規律を重んじてピューリタンのであった。アメリカは知的貴族がほとんどいない国ということになり、またそのような国民には鑑賞眼が育たないので、とりわけそこで生まれる現代文学は英国には及ばないとされた。

この状況の転回点が、MLA 内に正式にアメリカ文学のグループができ、1917年より順次刊行されていた *The Cambridge History of American Literature* が完成した1921年である。第1次世界大戦後、アメリカの文学を英国のそれと同等に肩を並べる「国民文学」にしようとする動きが現れる。要因として考えられるもののうち、ひとつは、大戦後世界の大国となり得たアメリカのナショナリズムの高揚、もうひとつは、1900年代のはじめの10数年でアメリカ文学を教え、それで論文を書く「英文学の片手間」ではない教授が増えたり、アメリカ文学で学位を取る学生が増加したことである<sup>(11)</sup>。この動きの先頭に立った Fred Pattee はアメリカ文学のアンソロジー、文学史のテキストなどの編纂にかかわり、また、英国文学の亜流ではないアメリカ文学を、

アメリカ独自の歴史的背景を考えることにより推進しようとする<sup>(12)</sup>。

もうひとつ、文学研究の脱フィロロジーの動きがある。文学に対する当時の学問的な態度の中心はフィロロジーであり、第1次大戦後に強くなったのは、文学の価値それ自体の批評を目指す動きであった。文学研究者は文学の普遍の価値を称揚するロマンス学者バビットらヒューマニストたちも含めて、英文学、アメリカ文学を問わず、脱フィロロジーをめざした。

英文学がアメリカ文学をサブカテゴリーに地歩固めをした時期にあって、1921年の *Cambridge History of American Literature* (CHAL) の完成は象徴的なできごとである。1917年から順次刊行されていたこの文学史は実は *Cambridge History of English and America* 全18巻のうちの最後の4巻であった。フィロロジー中心かつ英文学の中のサブカテゴリーの時代とあって、「英文学者」を中心とした執筆陣が「アメリカで書かれたもの」を年代順に配置、その内容も政治、経済の論争から口承文学、歌謡、アメリカにおける English language の発展、アメリカにおけるドイツ語、フランス語、スペイン語、イディッシュ語文学と「アメリカで書かれたもの」の範疇であれば幅広く記録されているのである<sup>(13)</sup>。これは逆に「文学」の線引きに起因する人種、階級、ジェンダー等の枠から脱した現在の修正主義の文学全集に近いといえるのかもしれないが、いずれにしろ、アメリカ文学の独立を考える向きにとってはアメリカ文学の定義や背景、また批評に無縁のようなこの文学史は不満の種であった。

1921年の MLA 年次総会で American Literature Group (ALG) が発足したのは従って、アメリカ文学のアイデンティティを求める文脈において、である。彼らは年次総会時に集まり、論文を発表して議論の場を設けた。初年には大学のカリキュラムにおけるアメリカ文学、翌年にはアメリカ文学の批評、さらに1923年にはアメリカ文学の教え方がテーマにあがる。そこではイギリス文学の分派ではなく、アメリカという国、あるいは歴史の意識を表出したものとして教えるべきであるという意見が大勢を占め、その中でアメリカ作家の伝記的事実の研究、アメリカ文学の背景の研究の必要性が確認されたほか、そのための作家の原稿リスト、アメリカ文学研究のビブリオグラフィづくりの委員会が設けられた<sup>(14)</sup>。

アメリカ文学の独自性とはなにか。その答えのひとつが1926年のALG会合で提示された。ヒューマニストのバビットの弟子ではあるが、師匠と違ってアメリカ文学の独立を強く押し出す Norman Foerster は、“New View Points in American Literature”と題した論文で、ピューリタンの伝統、ロマンティシズム、フロンティアスピリットを取り上げ、さらにその時の議論を踏まえてリアリズムを足し、この4つをア

メリカ文学の柱とした。それを受けて刊行された *The Reinterpretation of American Literature* (1928. 以下 *Reinterpretation*) は、ケンブリッジの米文学史に欠けているアメリカ文学の独自性をうたい、改めてアメリカ文学とは何か、と問い直し、しかも MLA のバックアップのもとに出された、いわばアメリカ文学の「正式な」アプローチであった。フォスターによる序文にはアメリカ文学の独立宣言とも言ってもよいほどにアメリカ文学の制度化への激越なまでの意志がみなぎっている。フォスターはまず世界の大国となったアメリカ文学は独立したものとして読まれるべきであって、それはアメリカ人が「自らを知る」必要を感じたからこそである、とアメリカ文学の必要を説く。

In the shock of the World War...our increasing awareness of our world supremacy in material force was more and more evoked a sense of need of self-knowledge.... In the universities of both America and Europe, the study of our literature as a revelation of our culture is at last being seriously undertaken<sup>(15)</sup>.

もうひとつは従来アカデミズム内外で自由に議論されてきたことに対して、その権威を専門教育を受けた教授からなるアカデミズムで領有しようという、プロフェッショナルリズムへの意志である。

In general it [national letters] has been a subject attractive to facile journalists and ignorant dilettanti, and repellent to sound but timorous scholars<sup>(16)</sup>.

おそらくここでの“facile journalists”や“ignorant dilettanti”というのは H. L. Mencken, Louis Untermeyer, Granville Hicks, John Macy, 印象批評の Joel Spingarn, さらに *America's Coming of Age* (1915) でアメリカ文学にはプログラムが必要であると説いた Van Wyck Brooks など、アカデミズムの外にいて大きな影響力を持っていた文芸ジャーナリスト・評論家であろう。左翼については同書でブルックスにつづく(左翼あるいはアカデミズムの外の)批評家は成功していないと断じて一蹴されているし<sup>(17)</sup>、印象批評はかねてより、パビットらからディレッタント扱いをされていた<sup>(18)</sup>。とりわけ、自らが編集する *Smart Set* や *American Mercury* 誌でピューリタニズム批判を行ったり、アメリカ文学について独自の評価を示したメンケンや詩人で評論家のアンターマイヤーはアカデミズムの外部にいるというだけでなく、大学教育を受けていないことを攻撃されることがしばしばであった<sup>(19)</sup>。

フォースターは *Reinterpretation* が MLA のアメリカ文学部会の要請のもとに編纂されたことを述べ、さらに大学におけるアメリカ文学の正当な立場を要請する。「大学の学部組織のなかでのアメリカ文学に適切な立場」を作り、アメリカ文学の学位を「英文学」の学位から脱却させるために「国家」の文学たるアメリカ文学を認知させること、そのためにピューリタニズム、荒野、ロマンティシズム、リアリズムの4本柱を使って、またそのような観点からアメリカ「独自」の文学「解釈」を教えることを説く<sup>(20)</sup>。その意味でもこの一冊はアメリカ文学の制度化へのマニフェストであり、だからこそ中表紙において編者 Foerster にはノースカロライナ大学教授という肩書きのかわりに“for the American Literature Group of the Modern Language Association”がついてもいるのだろう。アメリカ文学の学術雑誌として現在でも確固たる地位を占めている *American Literature* 誌は本書の翌年、ALG の機関誌として創刊された。

このような強い制度化への意志の現れに対し、いま一度 Humanist からの反撃（この時期とりわけ New Humanist と呼ばれる）があるのが 1930 年であるが、この年こそヴァンダービルト大学の関係者を中心にした文芸雑誌 *Fugitive* に関わった者を多数含む執筆者による南部農本主義のマニフェスト *I'll Take My Stand* が出版された年でもある。この流れの中で考えたとき、彼らの「立場」を単に北部産業主義に対するものと捉えるのはいささか単純にすぎることになる。

### III. ニューヒューマニズム論争

MLA にできたアメリカ文学グループと、アメリカ文学研究・教育のアプローチの雛形を与えようとした *Reinterpretation*、その公式学術雑誌としての *American Literature*。この雑誌に後年アメリカ文学を席卷する新批評のメンバーかつ南部人、いいかえればヴァンダービルト大学に縁の深い文学者——ランサム、Davidson、テイト、ウォレン——たちは創刊後 10 年たっても登場してこない。また、第 2 次世界大戦が終わってもアメリカ文学グループの中核となる委員の中に、これらの名前は見あたらない。ヴァンダービルトの文学者たちが当時制度化されつつあるアメリカ文学の学問に自分たちの位置づけをどのように行おうとしたのか。「南部」ということば抜きで考えるなら、ひとつには対ヒューマニズム、とりわけ対フォースターの立場を通じた、対「主流のアメリカ文学研究」の立場であったと言えるだろう。

*I'll Take My Stand* が出た 1930 年は、バビットらがニューヒューマニストとして

大きな話題となった年である<sup>(21)</sup>。彼らが文学として高く評価するのはブッダ、キリスト、パウロ、ダンテ、シェイクスピア、ミルトン、ゲーテ、アーノルドらであり、アメリカ文学はそれに比肩するものではないとされた。とりわけ人間の力を小さいものであるかのように描くナチュラリズムの作品が目立つ20世紀のはじめのアメリカ文学は唾棄されるべきものであった。ところが、その弟子のフォースターは上にも述べたようにアメリカ文学の独立を目指す立場である。といっても、あくまでバビットの価値判断は保持し、アメリカ文学を独立したものと扱いつつも同時にそればかりを偏重する向きを非難し、アメリカ文学は外国文化を使いこなす経験からこそ磨かれるとするフォースターの立場は、自らが編者としてまとめたアンソロジー *Humanism in America* に結実する<sup>(22)</sup>。5月、カーネギーホールには3000人の人々が集まり、バビットをはじめとするパネラーによるニューヒューマニズムをめぐるシンポジウムが開かれ、席上、上に述べたようなアプローチこそがアメリカが「世界の大国」かつ「20世紀文明のモデル」となる上で必要なことであるとされた<sup>(23)</sup>。シンポジウムと連動する *Humanism in America* が *Reinterpretation* の中心人物でもあるフォースターを編者としていたこともあって、この動きはアメリカ文学を担う人々を巻き込んだ。それどころか、伝統の価値を唱える彼らの意見は、開放的でリベラルだった1920年代が大恐慌の始まりによって終わった不安を味方につけて、突如大きな盛り上がりを見せることとなった。

それに応じて夏のはじめに出たのが *The Critique of Humanism* である。ここで注目しておきたいのは、その執筆陣である。そこにはアレン・テイト、Edmund Wilson, Malcolm Cowley, Kenneth Burke, R. P. Blackmur, Yvor Winters など後年批評の世界で名を挙げる人々が参加していた<sup>(24)</sup>。この顔ぶれからするとニューヒューマニストに反対するグループは大きくわけて、左翼の知識人とモダニズム系の文学者となる。ここには加わずに翌年 *Genteel Tradition at Bay* を発表した George Santayana も、ニューヒューマニズムを攻撃し、その「お上品な伝統」が唾棄してきたナチュラリズムを擁護しているという点ではこの流れに加えてよいだろう。

このふたつの書物の対立はまた、*Reinterpretation* で展開されたアカデミズムの特権化志向の延長線上にもある。*The Critique of Humanism* 側は、*Humanism in America* が *Reinterpretation* と同じくプロフェッショナルとアカデミー擁護に出てメンケン、ブルックス、スピングーンをアカデミズムの外にいる故に非難する姿勢をプリンストンやハーヴァードで宗教的、道徳的に瞑想する——“cloister”に引きこもる——隠者のイメージを使って攻撃している<sup>(25)</sup>。アメリカ文学研究が独立するという

のは学閥や階級も含めたうえで、文学に対するアカデミズムとしてのアプローチの地歩を築くことも意味していたのである。多分に銜学的なニュー・ヒューマニズムの象牙の塔は恐慌の嵐とともに吹き飛んだ観があり、1930年にフォースターがアイオワに移り、バビットがその2年後に死亡、彼らの強力な支持者、*Bookman* 誌の編集長、S. Collins がむしろ南部の農本主義者たちを支持する側にまわり、*Bookman* を *American Review* として仕切り直した頃にはこの論争は霧消していた。しかし、この論争こそ南部農本主義者の「立場」をより明確にする役割を果たしていたのである。

#### IV. 南部における衝突地図

実は上の図式は「南部」の比較的限定された地域に色濃く現れていた。*American Literature* の執筆者として、あるいは ALG の役員として *I'll Take My Stand* 前後の時期に名前が見えているのは University of North Carolina at Chapel Hill (UNC) の Norman Foerster (1923, 1928, 1929)、同じく UNC の Gregory Paine (1927, 1929, 1931, 1932)、チャペルヒルの隣町 Durham にある Duke 大学の Jay Hubbel (1925, 1939) である<sup>(26)</sup>。フォースターはバビットの弟子でヒューマニズムの影響を強く受け、*Reinterpretation* および *Humanism in America* の編集を担当したほか、ハブルとともに *American Literature* の創刊に深く関わっていた。そのハブルは *Reinterpretation* にフロンティア論を載せ、翌年 *American Literature* の初代編集長に収まる。Paine はハブルとともに同誌の編集に携わっていた。また、*Reinterpretation* にアメリカ文学の「ヨーロッパの背景」を論じた Howard Mumford Jones も UNC である<sup>(27)</sup>。ここからは、テネシー州（ヴァンダービルト大学）の隣の州にある「切手ほどの」小さな場所がヴァージニア大学とともに当時のアメリカ文学の中心人物たち（多くがハーヴァード出身で、ヒューマニストの色を受け継ぎながらアメリカ文学を英文学に比肩する存在として扱う立場）をかかえているという地理的な配置が浮かび上がる。

アメリカ文学研究の主流に位置するハブルは実はフロンティア論以外にも南部文学論を出版し、南部文学研究家と呼んでもよいほどであるが<sup>(28)</sup> 現在はほとんど言及されることがない。彼の評価の下落が今述べたような勢力地図と関係あるかどうか、ここでは論証できないが、いずれにしろ新批評の時代以降、その流れを汲むものとしての南部文学という枠がアプローチのキャノンとして設定できるとすれば、ハブルがそこに入らないことは確かであるし、また、このような学問への立場の違いの地理学を

考えることはあながち無謀な考え方でないかもしれない。Fred Hobson は *I'll Take My Stand* を執筆した 12 人の南部人が中南部、あるいは深南部の出身であって、伝統的に南部の知的リーダーシップをとってきたノースカロライナ、サウスカロライナ、ヴァージニアの出身ではないこと、さらにナッシュヴィルに集結した彼らがノースカロライナのチャペルヒル、ヴァージニアのリッチモンドというふたつの知的中心地がメンケン側、つまりはリベラルに落ちている、と考えていた点を指摘しているが<sup>(29)</sup>、それを敷衍すればハブルの浮沈にはその方向からの要素も少なくともひとつの原因となりうるだろう。

1920 年代から 30 年代にかけてヴァンダービルトの文学者にとってチャペルヒルという地名は意味のある、というよりは確執の対象であった。1920 年代、南部は「立ち遅れた (benighted)」土地としてのイメージを付与されていく。「ポトマック川の南」が「芸術のサハラ砂漠」で文化の不毛地帯であるとするメンケンによる糾弾だけでなく<sup>(30)</sup>、経済的な立ち後れ、KKK を始めとする保守反動思想もさまざまな方面からの批判にさらされた。メンケン主宰の *American Mercury*, 1918 年以降ヒューマニスト路線を捨ててリベラル側についた *Nation* ほか、*The New Republic*, *The Century* などの雑誌が「立ち遅れた」イメージを増殖させていった<sup>(31)</sup>。盲目的な信仰、KKK、リンチといった時代に逆行した社会、十二指腸虫にペラグラといった病の蔓延、シェアクロッパー、貧乏白人といった貧困の問題が繰り返し取り沙汰された。1924 年には『センチュリー』の常連で「ヤンキー」の社会学者 Tannenbaum による *Darker Phases of the South* が出版されるが<sup>(32)</sup>、人種差別や紡績工場での過酷な労働、劣悪な監獄、単作農業などの社会問題を延々と論じたその本は当時大変よく売れたという<sup>(33)</sup>。

そしておそらくそのイメージの仕上げとなったのが 1925 年に進化論教育の是非をめぐる行われたスコープス裁判である。この裁判は南部のファンダメンタリズム対近代的な思考という図式で見なされ、「猿裁判」として全米の注目を浴びる。裁判そのものは進化論教育を擁護したスコープスの敗訴だったにもかかわらず、というよりはむしろそのために南部の後進性を浮き彫りにする結果となった<sup>(34)</sup>。

このような南部の後進性イメージは南部の外だけで作られたのではない。1890 年代のニューサウスの運動以来脈々とつづくリベラルの伝統は、1920 年代、メンケンの鋭い批判に応えるかのように、南部の旧弊をめぐる容赦ない自己批判、社会改革を目指す言説として流通する。また、それを担っていたのが社会学者と、その科学主義を共有していたジャーナリストたちであり、彼らはまさにその科学主義ゆえに宗教の

ファンダメンタリストたちと時に先鋭に対立した<sup>(35)</sup>。そしてそのリベラルの学問的中心がチャペルヒルだったのである。チャペルヒルに創立されたノースカロライナ大学は伝統ある大学だが、1920年代の学長Chase, ついでGraham がリベラルな路線を取り、南部初の社会学部を創立、学部長に迎えられたHoward Odum は学長の強力な支援のもと、*Journal of Social Forces* を刊行、ときに学長、州知事まで巻き込む大論争を起こしながらも社会調査によって南部の旧弊を明らかにしようとする<sup>(36)</sup>。また、ノースカロライナの新聞に携わり2度にわたりピュリッツァー賞を受賞した当代随一のリベラルジャーナリストGerald Johnson もUNCでジャーナリズム教授を務めている。この時期のUNCは「アメリカ文学」を独立させたフォースターたちを寛容に招き入れるなど、新しい学問の牙城であった。

ここで注意しておきたいのは当時の知識人の交流がアカデミズムとジャーナリズム、あるいは異なる学問間の、といったディシプリンの境目を問題にしない広範に及ぶものだった事情である<sup>(37)</sup>。また、もうひとつ念頭におくべきは、ひとりの人物が語る内容が必ずしも文学なり社会学なりに限定されないという状況である。メンケンが社会批判だけでなく、アメリカ文学について書くことでアカデミズムから批判を浴びると同じように、ヴァンダービルトのグループも政治的発言をしつつ、文学について語るのである。

ヴァンダービルトのデヴィッドソン、テイトらは対チャペルヒルとでも言えるほどにUNCのリベラルらと敵対し、同時に同じくチャペルヒルにいたヒューマニズムの旗手であり、かつ制度として立ち上がったアメリカ文学の雄、フォースターとも対立する<sup>(38)</sup>。「盲目的な信仰、KKK、リンチ、十二指腸虫にペラグラ、シェアクロッパー、貧乏白人、ファンダメンタリスト」など南部の病弊を見つめるからこそ、メンケンの南部攻撃、さらには「社会学者を吐き出した」「トロイの木馬」たるリベラリズムの攻撃からも身を守らなければならないというのが例えばデヴィッドソンの立場である<sup>(39)</sup>。ヴァンダービルトの農本主義者たちにとって、1920-30年代の南部の知的地図においては、リベラルの極にいるのがチャペルヒルの——社会学者、英米文学のHoward Mumford Jones, 大学出版の編集——リベラルたち、Knickerbockerの編集するニューオーリンズの*Double Dial* 誌、さらにはあまたのジャーナリスト、リベラル雑誌の編集方針に添い、南部に厳しい自己批判の目を向けるT. S. Stribling, アースキン・コールドウェルといった作家らである<sup>(40)</sup>。また別の極には同じくチャペルヒルにいるニューヒューマニストとしてのフォースター。そのフォースターとペイン、デューク大学のハブルら、アメリカ文学研究の主流グループ、となるだろう。このよ

うなところに、さらに北部からの南部批判が加わるのであって、そう考えたとき彼らの「立場」は北部対南部の図式に収まりきるものではない。そして *I'll Take My Stand* はまさにこの幾重にも絡み合う対立の図式のただ中で企画が進められたものとして読むことができるのである<sup>(41)</sup>。

## V. ナッシュヴィル・アグレリアンの立場

結局 *I'll Take My Stand* とはどのようなものか—— *Walden* のようにアメリカのパストラルの伝統に属するのか、1930年代の地方主義運動の一環として捉えるべきなのか、神話と伝統を取り返そうとする「後ろ向き」の作業なのか、それともエコロジーを予見した書なのか。このように定まらない評価は多分にその茫洋とした「農本主義社会」像によるものではないか<sup>(42)</sup>。だとすればその茫洋としたイメージの正確な位置づけなどできようもないのではないだろうか。

ナッシュヴィルの詩人が農本主義者に転じたきっかけはスコープス裁判だと言われている<sup>(43)</sup>。しかし、契機はそうであるとしても *I'll Take My Stand* は単に「立ち遅れた」南部を擁護することが唯一の目的なのではない。そこには先に述べてきたような知的勢力地図が分かち難く書き込まれているのである。

まず、*I'll Take My Stand* の着想は何より対リベラルである。1929年、UNCのジョーンズが本を企画していることを知ったデヴィッドソンは早いところ「出て行って欲しい」オーダムが「ひらけた」ジョーンズと組んでおそろしくリベラルな本を出すかもしれないという危惧を抱き、先を越されまいと思う。その3カ月後、今度はテイトがニューヒューマニズムに大反対しながら南部の“provincialism”運動を対リベラルで持ちかけ、同時にジョーンズたちに先を越されることを憂え、さらには競争心をあらわにする<sup>(44)</sup>。また、「対コミュニスト」の色もあったためにタイトルの候補として“Tracts Against Communism”も考慮<sup>(45)</sup>、ニューヒューマニストに触れて南部にもシンポジウムを、と呼びかける<sup>(46)</sup>。

その結果ランサム、デヴィッドソン、Lytleの手になる序文<sup>(47)</sup>は「対北部」という単純な図式には決してならず、むしろ上に述べたような錯綜した対立関係を編み込んだところに成り立っている。産業化の福音に改宗して信奉するニューサウスは「北部のレプリカに過ぎない」<sup>(48)</sup>というとき、それは北部攻撃のみならず、ニューサウスを推進する南部リベラルへの攻撃でもある。また、リベラルが通常目指す「教育の努力、文化の制度や基金」といった解決策は根本的なものではないとも言う<sup>(49)</sup>。次に批判の

矛先はいわゆるニューヒューマニストたちに向けられる。彼らが頼るのはあまりにも「抽象的な」システム、「古典からもってきたモラルの『チェック』」というまたもや「抽象的」ニセモノであって、「ほんもの」のヒューマニズムは経済や社会についての批判の力を持つべきだとし、自分たちの方こそが農本主義という根を持っていると主張する<sup>(50)</sup>。さらに、その批判のペンは Kommunismus をも断罪する<sup>(51)</sup>。大恐慌の中で経済、社会の状況を考えてそれを文学・文化への実践と結びつけて価値表明しようとするこの宣言は、このようにさまざまな立場とのせめぎ合いの中で自らの足場を確保しようとするために、逆に農本主義社会のイメージはぼやけている。そこに描かれるのはせいぜい、“manners, conversation, hospitality, sympathy, family life, romantic love” といった生活の要素が農本主義社会ならば正しく築かれる、ということではない<sup>(52)</sup>。

Technically, perhaps, an agrarian society is one in which agriculture is the leading vocation, whether for wealth, for pleasure, or for prestige—a form of labor that is pursued with intelligence and leisure.... But an agrarian regime will be secured readily enough where the superfluous industries are not allowed to rise against it. The theory of agrarianism is that the culture of the soil is the best and most sensitive of vocations....<sup>(53)</sup>

この「農本」社会はヨーマンが担うのか、それとも大プランターのイメージなのか。ここにあるのは対産業主義・対共産主義・対ニューヒューマニズム・対南部リベラル、としての非常に観念的な農本主義、つまり、実体がある何かではなくイメージ、あるいは Louis D. Rubin, Jr. の言葉を借りるならばメタファー<sup>(54)</sup>であって、単なる懐古的旧南部でもない。だからこそアグレリアンたちの抽象的農業のイメージは貧しい農民の現実を知らないからであるとするジャーナリストからの攻撃が出てくる<sup>(55)</sup>。けれども、このあいまいさはなにより彼らが他の陣営との差異化を図ろうと多層的にアイデンティティを決定しようとしたことに大きな要因があるのであって、単に産業化に反対して牧歌的世界を神話化したのだ、と断じるのは逆にその部分を見落としてしまうことになりかねない。

しばしば農本主義は 1936 年頃に死に、そのあとでテイト、ランサムらは批評に目を向けたと書かれる<sup>(56)</sup>。新批評は政治を否定しているように見えるが本当にそうだろうか。一見して政治性と隔絶するかに見えるものに向かうその変転は、しかし、完全に政治的な身ぶりとは断絶する、ということではないかもしれない。たとえば、1935 年

テイトは、ニューヨークの出版界の要請にこたえて「南部らしい」センチメンタル小説を書くのではなくて、そのような要請と金銭に超然としていられるよう南部に文芸雑誌や出版業を確立させて南部の芸術と芸術家が独立することを要請し、また、ランサムは南部の独自の風土がモダニズムを生むことなどを語っている<sup>(57)</sup>。そしてテイト、ランサム、デヴィッドソン、ウォレン、ブルックスを始めとする南部の執筆者12名を含む21名の保守主義者が“Decentralism”を唱えた *Who Owns America?* はその1年後、総選挙の年のことである<sup>(58)</sup>。また、ウォレンが編集する *Southern Review* はすでに1933年に創刊され、とりわけ最初の数年は新批評的エッセイと必ずしも文学に限定されない南部論は同時進行的に書かれている。つまり、彼らは農本主義を主張し、大企業への資本と権力集中に反対しながら、同時に「モダニズムと南部文学」を接続し、かつ新批評を構築しつつあったのである。またその10年後に南部文学のキャッチフレーズ“past in the present”を提供したテイトの“New Provincialism”も、その言葉は実は冷戦構造を見据えた文脈のなかにこそある。してみれば農本主義から新批評への移行と、「過去の中に現在を見る」南部文学、というもののジャンルの線引きについて、どれかが政治的であり、どれかが政治的ではなく、という語り方をしたり、それぞれを別個のものとして切り離すことはできないということになるだろう。

*I'll Take My Stand* における農本主義は、経済・社会の体制というからには具体性を持っているように見えるが、他の思想陣営との多重対立のなかで構想される限りにおいて、それは具体性を欠いたあいまいさを備えるようになっていた。物質主義とたたかい、あいまいなままで提示される過去の伝統に範を求めるならば、その理想は象徴と呼ぼうと、神話と呼ぼうと、目の前にはない過去の南部以上のものにはなることはない。神話、アイコン、あるいは象徴としての、あらかじめ「形式」としての南部となる。こうしてみると、アイコンとしての過去が常に立ち現れ、また、そのようなものとしての「歴史」を背負う南部文学と、文学の自律をうたう新批評の形式主義美学の距離は遠くないのかもしれない。

こう考えてくると、農本主義者の文化ナショナリズム的な部分と南部文学というジャンル、そしてまた作品自律論を唱えて一見そのようなメンタリティを排したところに成立したかに見える新批評は接続したものとして——新批評の南部性として——捉えることができそうである。そしてそこからならば、「南部ルネッサンス」については批評の立場だけでなく（文学制度におけるものも含めた）政治的立場を、最終的には「現在の中の過去」に合致しないということはないのに Glasgow, Lilliam Smith, Stri-

bling 等が南部ルネッサンスからはずれたり、ハブルの南部文学論が忘れ去られていった経緯を考察できる可能性がある。この部分については別稿で考察することにするが、いずれにしろヴァンダービルトの農本主義文学者の「立場」は北部の産業主義への単なる抵抗なのではない。当時の読みのキャノンを成立させようとする New Humanism の立場、および *Reinterpretation* が出したモダニズムを含まぬ、あるいは南部文学というジャンルを含まぬアメリカ文学研究の雛形、リベラルとその文学といった多様な立場の中で足場を作ろうとする試みであったと言ってよいだろう。非政治的にみえる新批評は、すくなくともその主要な一角がこのようにリベラリズムを嫌い、独自のヒューマニズムを目指し、社会学者と対立しさえする政治的な人々が担うところであったという状況は、「南部文学」というジャンルのあり方に関わるものとして考えるべき問題のひとつであろう。

## 注

1. Robert Penn Warren, *The Legacy of the Civil War* (1961; Lincoln: University of Nebraska Press, 1998), pp. 14-15. Allen Tate, "The New Provincialism," *The Virginia Quarterly Review* (Spring 1945). Rept. in Allen Tate, *Essays of Four Decades* (Chicago: The Swallow Press, 1968), p. 545.
2. コロドニーの問題提起とそれに引き続く議論はすべて *American Literature* 誌上のものである。Annette Kolodny, "The Integrity of Memory: Creating a New Literary History of the United States," 57 (1985), pp. 291-307; William C. Spengemann, "American Things/Literary Things: The Problem of American Literary History," 57 (1985), pp. 456-81; Emory Elliott, "New Literary History: Past and Present," 57 (1985), pp. 611-21; Sacvan Bercovitch, "American Canon and Context: Literary History in a Time of Dissensus," 58 (1986), pp. 99-107.
3. Michael Kreyling, "Southern Literature: Consensus and Dissensus," in *American Literature* 60 (1988), pp. 84-95.
4. Carol S. Manning, "The Real Beginning of the Southern Renaissance," in Carol S. Manning, ed, *The Female Tradition in Southern Literature* (Chicago: University of Illinois Press, 1993), p. 37. マニングの批判の対象と思われるのが Louis D. Robin, Jr. and Robert Jacobs, eds, *Southern Renaissance: The Literature of the Modern South* (Baltimore: Johns Hopkins, 1954). Richard King, *A Southern Renaissance: The Cultural Awakening of the American South, 1930-1955* (N. Y.: Oxford University Press, 1980), pp. 8-9. Thomas Daniel Young, *The Past in the Present: A Thematic Study of Modern Southern Fiction* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981), pp. 87-115.
5. C. Vann Woodward, "Why the Southern Renaissance?" *The Virginia Quarterly Review*, 51: 2 (Spring, 1975), pp. 222-239. また、ここでもタイトの "past in the present"

が使われている。

6. Richard H. King, "Politics and Literature: The Southern Case," *The Virginia Quarterly Review*, 64 : 2 (Spring, 1998), pp. 189-201.
7. Howard Mumford Jones, "Is There a Southern Renaissance?" *The Virginia Quarterly Review* 6 : 2 (April, 1930) pp. 184-197.
8. 教育史については H. G. Good, *A History of American Education* (New York : McMillan, 1956). この時期に *Sewanee Review* の編集に携わっていた Trent は後に『ケンブリッジアメリカ文学史』の主要執筆者のひとりとなる。Kermit Vanderbilt, *American Literature and the Academy: The Roots, Growth, and Maturity of a Profession* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1986), p. 130.
9. Harvard, Yale, Columbia, Johns Hopkins, Princeton などのいわゆる名門校ではむしろアメリカ作家を教えることは歓迎されるべきことではなかった。Vanderbilt, p. 110.
10. 初期の文学選集としては、1889年から1900年にかけて E. C. Stedman, ed, *A Library of American Literature* 全 11 巻が Twain の作品を扱っていた Charles L. Webster より刊行されている。また、文学史としては Brett Wendell, *Literary History of America* (1900). Vanderbilt, p. 110.
11. Vanderbilt, pp. 186-192.
12. Gregory S. Jay, ed, *Dictionary of Literary Biography*, vol. 71 (A Brucoli Clark Layman Book, 1988), pp. 187-200.
13. *Cambridge History of English and American Literature* (1917-1921). <http://www.bartleby.com/index.html/cambridge/>. 現在左記の場所にて電子テキストとして全文が公開されている。執筆の中心となったのは英文学者の W. P. Trent, J. Erskine, さらに (New) Humanist の S. P. Sherman およびその弟子の C. Van Doren. とりわけ Trent は *Sewanee Review* の初代編集長であり、また、南部作家のシムズを批判したことで逆に身の危険を感じるほどの批判を浴びた人物として南部文学にも関わりのある人物である。Vanderbilt, p. 6.
14. 1921年に読まれた論文は、Arther Quinn, "The Graduate Teaching of American Literature" と Walter Bronson, "The Place of American Literature in the College Curriculum". 1922年は Percy Boynton, "A Proper Critical Attitude to American Literature" および Henry Canby, "Some Standards of Criticism". 1923年は Pattee, "American Literature as a College Course" である。Vanderbilt, p. 253.
15. Norman Foerster, ed, *The Reinterpretation of American Literature : Some contributions toward the understanding of its historical development* (1928 ; New York : Russel and Russel, 1959), p. xix.
16. Foerster, p. xx.
17. Foerster, p. xvii.
18. Vanderbilt, p. 194.
19. 大学の外の知識人の代表格メンケンはお上品な伝統が好んだ Irving, Holmes, Lowell を「化石文学」と呼び、むしろ Dreiser, Mark Twain などを高く評価している。H. L. Mencken, *A Book of Prefaces* (New York : Knopf, 1917). そして, New Humanist

の代表格の More に対し、「象牙の塔」から出てくるようにと述べる。Mencken, *A Book of Prejudices: Third Series* (New York: Alfred Knopf, 1922). また、シャーマンなどによるメンケンの学歴に対する批判は Vanderbilt, p. 208.

20. Foerster, pp. xix-xxvii.
21. この動き全体についての研究書としては、J. David Hoeveler, Jr., *The New Humanism: A Critique of Modern America, 1900-1940* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1977).
22. Norman Foerster, ed, *Humanism in America: Essays on the Outlook of Modern Civilization* (New York: Farrar and Rinehart, 1930), pp. x, xii. 本書への寄稿者は Louis Trenchard More, Irving Babbitt, Paul Elmer More, G. R. Elliott, T. S. Eliot, Frank Jewett Mather, Jr., Alan Reynolds Thompson, Robert Shafer, Harry Hayden Clark, Stanley P. Chase, Gorham B. Munson, Bernard Bandler II, Sherlock Bronson Gass, Richard Lindley Brown.
23. Foerster, *Humanism in America*, p. xvi.
24. C. Hartely Gratten, ed, *The Critique of Humanism: A Symposium* (New York: Bower and Warren Inc., 1930). なお、テイトのエッセイのタイトルは “The Fallacy of Humanism”.
25. Foerster, *Humanism in America*, p. 233; C. Hartely Gratten, p. 127.
26. 1948 年分までの ALG の役員名簿は Vanderbilt, pp. 546-548.
27. ハブル, ジョーンズの論文はそれぞれ Foerster, *The Reinterpretation of American Literature*, pp. 39-61, 62-82.
28. ハブルの南部研究には *The South in American Literature, 1607-1900* (1954), *Southern Life in Fiction* (1960) などがあるが現在ほとんど取り上げられることはない。研究社の『英米文学辞典』はハブルの主たる業績を南部文学研究としている。西川正身, 平井正穂編, 『英米文学辞典第三版』(研究社, 1985), p. 611.
29. Fred Hobson, *Tell About the South: The Southern Rage to Explain* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1983), pp. 213-214.
30. H. L. Mencken, “The Sahara of the Bozart” (1920) in William Andrews, M. Gwin, T. Harris, F. Hobson, eds, *The Literature of the American South* (New York: W. W. Norton and Company, 1998), pp. 369-78.
31. George Tindall, “The Benighted South: Origins of a Modern Image,” *Virginia Quarterly Review* xl. (Spring 1964), pp. 281-64.
32. Frank Tannenbaum, *Darker Phases of the South* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1924).
33. Hobson, p. 184.
34. 当時の裁判を回顧して書かれたあるエッセイの中には、Mencken がスコープス裁判にあらわれ、ぎらぎらした風情を醸し出していた、とある。その作者も裁判当時ファンダメンタリズムを大変な脅威とみなしていた。Joseph Wood Krutch, “Dayton: Then and Now” reprinted in Willard B. Gatewood, Jr., ed, *Controversy in the Twenties: Funda-*

- mentalism, Modernism, and Evolution* (Nashville: Vanderbilt University Press, 1969), pp. 358-367. その他スコープス裁判については Leslie H. Allen, *Bryan and Darrow at Dayton: The Record and Documents of the Bible Evolution Trial* (New York: Russell and Russell, 1925) がその記録であり, また, スコープス裁判も含むファンダメンタリズムの問題については Norman F. Furniss, *The Fundamentalist Controversy, 1918-1931* (Yale UP, 1954) に詳しい。
35. ニューサウスについては George B. Tindall, *The Emergence of the New South 1913-1945* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1967). 20年代を含む南部のリベラリズムおよびリベラルなジャーナリズムについて当時書かれたものとしては Gerald W. Johnson, "Journalism Below the Potomac," *American Mercury* IX: 33 (Sept 1926), pp. 77-82; William C. Havard, "The Journalist as Interpreter of the South," *The Virginia Quarterly Review* 59: 1 (Winter 1983), pp. 1-21; Virginius Dabney, *Liberalism in the South* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1932). 南部のリベラルなジャーナリストについての概要を述べた研究書としては John T. Kneebone, *Southern Liberal Journalists and the Issue of Race, 1920-1944* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1985).
36. John M. Gibson, "A Liberal at Chapel Hill," *Southwest Review* XX: 2 (January 1935), pp. 124-137. Louis Wilson, *The University of North Carolina, 1900-1930: The Making of a Modern University* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1957), pp. 437-525. 1925年, オーダムが編集する *Journal of Social Forces* の複数の記事が南部のファンダメンタリズムを批判したかどで州の聖職者団体の公開質問状にはじまり, 州知事まで巻き込む社会問題となる。1923年あたりからの進化論論争の中でファンダメンタリズムの原理主義が問題になり, リベラル側の人々と衝突する一例である。Willard B. Gatewood Jr., "Embattled Scholar: Howard W. Odum and the Fundamentalists, 1925-1927" in *The Journal of Southern History* XXXXI: 4 (November 1965); Willard B. Gatewood, "The Evolution Controversy in North Carolina, 1920-1927" in *The Mississippi Quarterly* XVII: 4 (Fall 1964). オーダムについては Morton Sosna, *In Search of the Silent South: Southern Liberals and the Race Issue* (New York: Columbia University Press, 1977); George Tindall, "The Significance of Howard Odum to Southern Histories: A Preliminary Estimate," *The Journal of Southern History* XXIV (August 1958), pp. 285-307.
37. たとえば, オーダムとメンケン, ジョンソンは互いに頻繁に連絡を取り合い, 協力しあっている。Howard Odum Papers in North Carolina Collection of Wilson Library, University of North Carolina at Chapel Hill. オーダムの膨大な書簡からは当時のリベラルジャーナリストのみならず, 論敵 Davidson らとの活発なやりとりの様子が伺える。なお, 1920-30年代, アグレリアンと南部に関して意見を戦わせたジャーナリストは *Baltimore Evening Sun* 紙の Gerald W. Johnson をはじめとして, *Chattanooga News* の George Fort Milton, *Richmond Times-Dispatch* の Virginius Dabney, *Atlanta Constitution* の Ralph McGill など代表的。Johnson は UNC の Howard Odum をバックアップし, Milton も南部の政策委員会に属するなど, 彼らはしばしば南部のプロGRESSIVEな政策にかかわっている。また, *I'll Take My Stand* と前後してリベラルな学者やジャーナ

- リストによる南部研究の大著が相次いで出版されている。Howard Odum, *An American Epoch: Southern Portraiture in the National Picture* (New York: Henry Holt and Company, 1930), Broadus Mitchell and George Sinclair Mitchell, *The Industrial Revolution in the South* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1930), William Terry Couch, ed, *Culture in the South* (Chapel Hill; The University of North Carolina Press, 1934).
38. Donald Davidson, "Dilemma of the Southern Liberals," *American Mercury* 31: 122 (February 1934), pp. 227-235; John T. Kneebone, pp. 56-73.
39. C. Vann Woodward, "Why the Southern Renaissance?" *The Virginia Quarterly Review* 51. 2 (Spring 1975), p. 232. Davidsonの挙げた要素は当時「立ち後れた」南部を表すおきまりの表現である。たとえば、アグレリアンの *I'll Take My Stand* を酷評したリベラルのジャーナリスト, Gerald W. Johnson も同様の表現を使って、逆にアグレリアンがそういう現実を直視していないことを非難する。Gerald W. Johnson, "No More Excuses: A Southerner to Southerners," *Harpers* CLXII (Feb. 1931), p. 337; "The South Faces Itself," *The Virginia Quarterly Review* 7: 1 (Jan. 1931), p. 157.
40. 南部ルネッサンスの線引きが男性モダニズム中心主義であって、それによりエレン・グラスゴーが同じ時代でもはずれる、というマンシングの主張が取りあつかいそこねているものとして、たとえば T. S. Stribling などが上げられる。同じく南部ルネッサンスの時期の作家であった Stribling はあまりにも冷酷な社会的リアリズムである、と Warren に徹底的に批判を浴び、人気作家であったにもかかわらず結局南部文学のキャンノンからはずれていく。これを南部文学におけるモダニズムの制度化とからめて論じたものが James H. Justus, "Southern Modernism and the Battle of Literary Succession," *The Southern Literary Journal* XVII: 1 (Fall 1994), pp. 6-17. また、「南部文学」が土地と記憶をテーマとして、手法としてはモダニズムを偏重してそのアンソロジー等を編纂してきているという主張をするのは Julius Rowan Raper, "Inventing Modern Southern Fiction: A Postmodern View," *The Southern Literary Journal* XXII: 2 (Spring 1990), pp. 2-18.
41. 新批評を制度と政治の面から捉えていて示唆に富む Jancovich もそのような枠組みを取り入れている。Mark Jancovich, *The Cultural Politics of the New Criticism* (New York: Cambridge University Press, 1993), p. 25. Kreyling もまた New Humanist とプロGRESSIVE との3つどもえとし、より広いコンテクストを考えている。Michael Kreyling, *Inventing Southern Literature* (Jackson: University of Mississippi Press, 1998).
42. 本文中に例に挙げた「位置づけ」については Richard Gray, *Writing the South: Ideas of an American Region* (Cambridge University Press, 1986), p. 133.
43. スコープス裁判が *I'll Take My Stand* へと向かわせるひとつのきっかけであった、ということについては Rob Roy Purdy, ed, *Fugitives' Reunion: Conversations at Vanderbilt, May 3-5, 1956* (Nashville: Vanderbilt University Press, 1959), p. 209; Louise Cowan, *The Fugitive Group: A Literary History* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1959), pp. 206-8.
44. Davidson to Tate, June 29, 1929; Davidson to Tate, October 26, 1929; Tate to Davidson, August 10, 1929; Davidson to Allen, December 29, 1929 in John Tyree Fain and Thomas Daniel Young, eds, *The Literary Correspondence of Donald Davidson and Allen Tate* (Athens: University of Georgia Press, 1974).

45. Richard Gray, pp. 127-128.
46. Tate to Davidson, Augsut 10, 1929 in *The Literary Correspondence*.
47. 3人で書いたとはいっても主な執筆者はランサムであった。Hobson, p. 212.
48. *Twelve Southerners, I'll Take My Stand : The South and the Agrarian Tradition* (1930 ; Baton Rouge : Louisiana State UP, 1977), p. xxxix.
49. *Twelve Southerners*, p. xliii.
50. *Twelve Southerners*, pp. xlv, 5-7.
51. *Twelve Southerners*, pp. xlv-xlvi.
52. *Twelve Southerners*, p. xliii.
53. *Twelve Southerners*, p. xlvii.
54. Rubin, Jr. は1977年のリプリント版に新たにつけた序文の中でナッシュヴィルの農本主義をメタファーである, としている。*Twelve Southerners*, p. xvi.
55. Kneebone, pp. 57-73.
56. John M. Bradbury, *The Fugitives : A Critical Account* (Chapel Hill : The University of North Carolina Press, 1958), p. 107.
57. Allen Tate, "The Profession of Letters in the South," *The Virginia Quarterly Review* 11. 2 (April 1935), pp. 161-176. John Crowe Ransom, "Modern with Southern Accent," *The Virginia Quarterly Review* 11. 2 (April 1935), pp. 185-200.
58. Herbert Ager and Allen Tate, eds, *Who Owns America ?* (1936 : Wilmington, Delaware : ISI Books, 1999).